Japanese Association for Religious Studies

高嶋米峰と丙午出版社

大谷栄一

近代日本の仏教界における布教・教化の知識や仏教研究者の学知の成果は、雑誌や書籍等の印刷メディアを通じて公にされてきた。しかし、どのような布教・教化が行われ、どのような研究成果がもたらされたのかについては研究の進展があるものの、それらがどのように公刊され、受容されたのか、という研究は少ない。そこで、本報告では、高嶋米峰（一八七五―一九四九）らによって創設された仏教系出版社・丙午出版社（一九〇六―三四）の出版活動を取り上げ、「明治仏教（近代仏教）と出版メディア」の関係という観点から、明治後期以降の日本社会において、〈仏教〉に関する情報や知識、学知が〈出版社〉というメディアを通じてどのように公にされていったのかを考察した。

米峰は、評論家、学者、教育家、社会運動家、出版人、商人等の多面的な顔を持つ「革新仏教思想家」（池田英俊）であり、禁酒運動、動物愛護運動、廃娼運動、婦人運動等に関わった行動する仏教系知識人であった。とりわけ、明治三二年に結成された新仏教徒同志会の中心メンバーとして、新仏教運動を牽引した在家仏教者として著名である。

明治三四年、米峰は、恩師の井上円了から哲学館（東洋大学）の教科書販売を依頼され、大学近くに鶏声堂書店を開店し、明治三九年には丙午出版社を創業する。出版社の運営に際しては、東洋哲学会の機関誌『東洋哲学』の編集や円了が設立した哲学書院への勤務を通じて、編集者・出版者としてのノウハウを習得したものと思われる。

現時点で確認できている丙午出版社の出版点数は二七五点で、出版物のジャンルは、仏教学、哲学、言語学、法話、評論、修養、社会主義、健康法、神秘主義、文学と幅広い。そのラインナップは学術書が中心であるものの、エッセイや一般書も刊行されており、一年間に平均一〇冊の刊行をしていた。著者の特徴は、（一）仏教学・印度哲学者・宗学者（井上円了・前田慧雲・大内青巒・村上専精・権田雷斧・釈宗演・姉崎正治・高楠順次郎・斎藤唯信・秋野孝道・忽滑谷快天・荻原雲来・常磐大定・木村泰賢・矢吹慶輝・長井真琴・野々村直太郎・竹田黙雷・原田祖岳・小野玄妙等）、（二）評論家・ジャーナリスト（三宅雪嶺・黒岩涙香・久津見蕨村等）、（三）東洋大学関係者（釈清潭・土屋弘・林竹次郎等）、（四）「新仏教」関係者（杉村楚人冠・渡辺海旭・加藤咄堂・境野黄洋・鈴木大拙・毛利柴庵等）、（五）社会主義者（幸徳秋水、堺利彦等）と大別することができ、米峰の人脈にもとづく人々が多いことがわかる。

なお、学術書については、明治三〇年代以降の知識人読者や学生が購入しており、そのうち、学生については、教科書として買い求めていたことが推察できる。丙午出版社の企画として、大正六年から一二年にかけて刊行された「仏教大観」シリーズ全一〇巻があるが、これはもともと「仏教講義録」という通信教育のテキストが単行本化されたものだった（この発想自

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

体も、円了の「哲学館仏教専修科講義録」に発想を得ていると思われる)。つまり、仏教学者や印度哲学者の講義を「講義録」としてパッケージ化し、それを活字メディアとして刊行したのがこのシリーズであり、このシリーズが、学校という場で教科書として用いられたのである。つまり、米峰は、教科書を販売する役割を鶏声堂書店で引き受けるのみならず、教科書を出版する役割も、丙午出版社を通じて引き受けたのである。

明治三十年代は近世的読書の世界から、活字メディアを基盤とする近代的読書世界への転換期である(永嶺重敏)が、明治三十年代以降の読書文化の変容は、出版社を通じて刊行された出版物を通じて、(また、学校教育という場を通じて)「仏教を学ぶ」という読書実践をもたらしたのであり、その読書実践を支えるテキストを提供したのが、丙午出版社という出版メディアのはたした役割であった。

パネルの主旨とまとめ

大谷栄一

本パネルは、近代日本の革新的な仏教運動である新仏教運動の全体像を明らかにするため、二〇〇七年八月に結成された新佛教研究会(代表者・吉永進一氏)の研究成果の中間報告として実施された。今回は、「明治仏教とメディア」の分析というテーマの下、仏教の教説や思想、メッセージ等を伝える者(発信者)と伝えられる者(受信者)の間のコミュニケーションのあり方とその手段(メディア)を検討するため、「演説」「講演」「大学」「雑誌」「出版社」という具体的なトピックを取り上げ、四名が報告を行った。

星野報告では、明治前期の「仏教演説」に焦点を当て、明治十年代中葉から明治二十年代初頭までが活発な時期であり、知識人教化を問題とし、「演説」という新しい媒体を用いたコミュニケーションであったことを明らかにした。続く岡田報告も「仏教演説」を取り上げ、「節談説教」に代わって「仏教演説」という新たな教化手法が採択されていく歴史的経緯を、西洋式の修辞法や弁論術を導入した「演説の名手」加藤咄堂(一八七〇―一九四九)の著作と活動に注目して分析した。岩田報告では、宗教的伝統に対する「自由討究」という態度・方法の問題を取り上げ、前田慧雲(一八五七―一九三〇)の「自由討究」の主張に対する西本願寺教団の対応、前田が学長を務めた高輪仏教大学の教育や出版・演説活動を分析した。大谷報告では、高嶋米峰(一八七五―一九四九)らによって創設された丙午出版社の出版活動を対象とし、明治後期以降、「仏教」に関する情報や知識、学知が「出版社」というメディアを通じてどのように公にされていったのかを考察した。

コメンテータの赤松徹真氏からは、各報告に対して、懇切丁寧なコメントがなされた。星野報告に対しては、真宗の伝統では「法談」や「示談」として門徒に教えを説くことは行われていたが、不特定多数の聴衆に対する「演説」という言語行為には新しさがあり、それは時代状況と関連していたことが述べられ、岡田報告には、明治六年の教部省達によって、旧来の「法

NII-Electronic Library Service